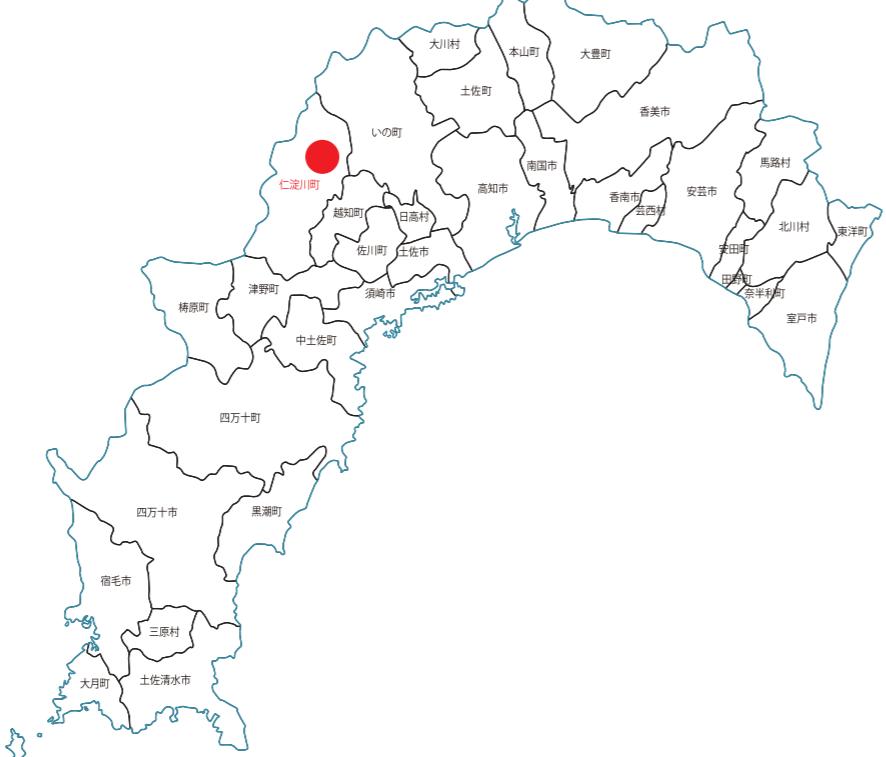


21

# やす い かぐら 安居神楽 (国指定 S55.1.28)

かぐら  
神楽

安居川沿いの集落の秋祭りに奉納される。寛政2年(1790)の神楽本、天保9年(1838)の古面などが神楽年代を示す確かな資料。伝承では隣村吾川郡吾北村(現いの町)の岡林家から伝授を受け、大屋地区の岡林家がこれを伝え、神楽組は古くから大屋・宮ヶ平集落で社職岡林家を中心に組織されていた。大正5年ごろ安居の神職安居宝定氏が伝授を受け、これらの舞人たちが保存伝承をしてきている。初祈り、幣舞、順の舞、悪魔払い、神迎え、猿田彦、舞出し、二天、將軍、弓、手草、折敷、長刀、山主、四天、鬼神、太鼓鎮の演目がある。舞出しが、天照大神が天岩戸から出るさまを演じるもの。1年ごとに河内神社(12月8日)と熊野神社(12月12日)で交代に行われる。

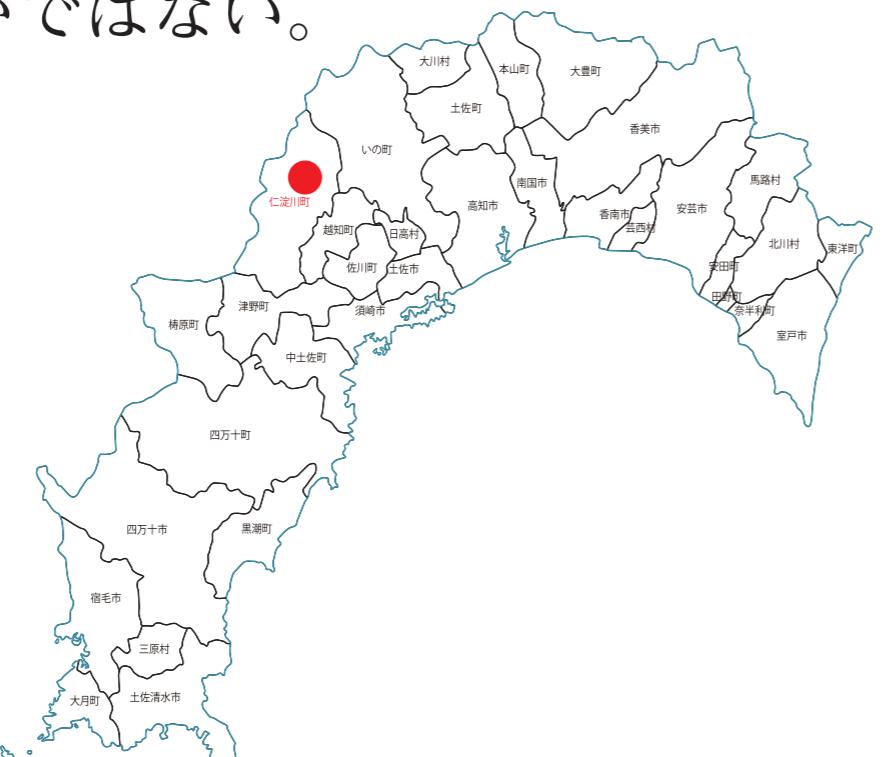


22

# いけ がわ かぐら 池川神楽 (国指定 S55.1.28)

かぐら  
神楽

池川川沿いの大野、用居、桧生などの集落の秋祭りに奉納されていたものであるが、過疎、氏子数の減少により現在定期的に奉納されているのは池川の池川神社で11月23日のみとなっている。宮祓、悪魔払い、和卓、神迎え、二天、手草、兜勤、天岩戸、四天、長刀、山主、將軍、王神立神儀、太鼓鎮めの演目からなる。舞台天井には神宿りに相当する飾り物はないが、四方には見事な切り抜き紙が張り巡らされている。託宣をしている翁神を思わせる黒翁面の古吟の舞は注目される。衣装は華麗であり、雅楽の冠り物である黒兜を着用するなど土佐の神楽では優雅な趣をみせている。池川の社職阿部家を中心継続されてきたものであるが、その経緯については定かではない。

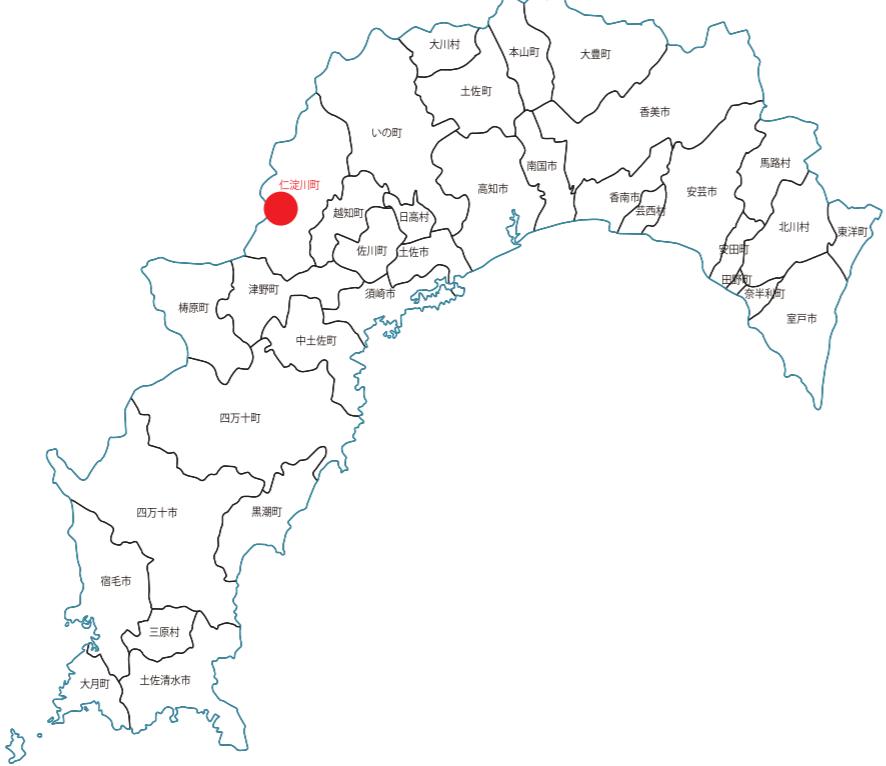


23

かぐら  
神楽

# な の がわ いわ と かぐら 名野川岩戸神楽 (国指定 S55.1.28)

仁淀川町名野川に伝承されているもの。伝承としては、寿永(1182～)とも弘安(1278～)ともいう年に、京都からの落人で下名野川二所大明神を祀る古味敷刀なる者がいて、その末裔日浦小太夫なる者、伊勢神宮を崇敬すること深く、伊勢神楽を軸に名野川神楽を編んだといわれている。注連、白開、一番神、神迎え、鉏女、岩戸、弓、飛出、折敷、豊熟、二天、山主、四天、長刀の舞がある。注連舞に続く白開は舞台天井に吊りさげるものであり、六角形木枠に切り抜き紙を貼り、モミと称する赤布を扇3つを円形に組み合わせたものの中心から垂らすもので、県下神楽の中では注目される。11月15日名野川神社、12月8日下名野川神社などで奉納される。

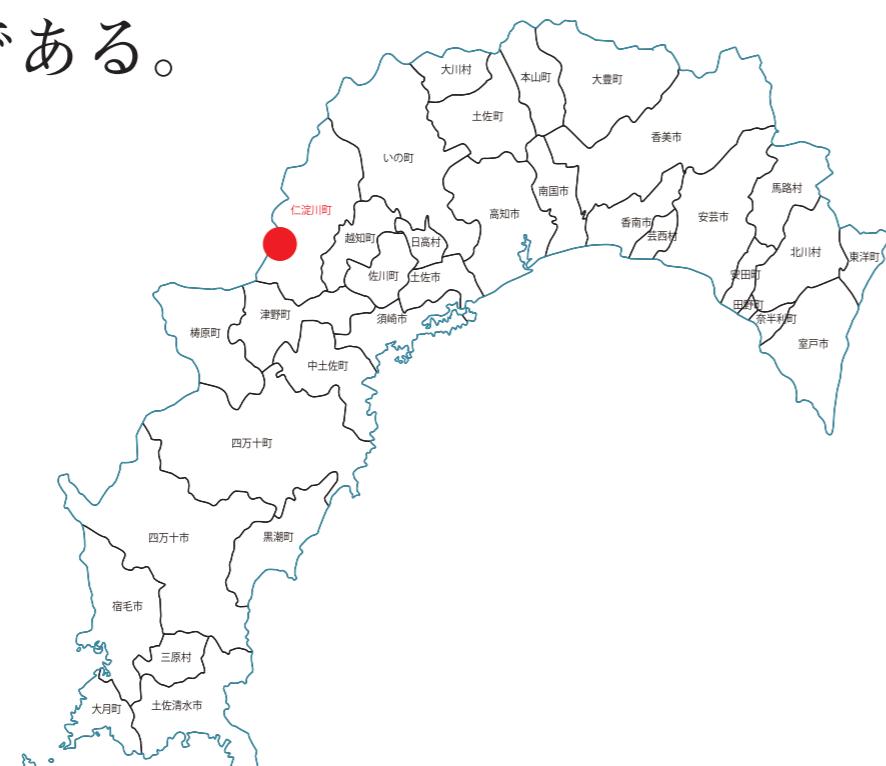


24

さいれいぎょうじ  
祭礼行事

# あき ば まつり 秋葉祭 (県指定 S37.1.26)

2月9日から3日間に及ぶ秋葉神社の春祭り。9日、本社から岩屋神社へと神幸が出立する。岩屋神社は、文治元年(1185) 静岡県秋葉神社から最初に勧請したところで、10日深夜には御神体は旧関所番市川家に遷座される。11日早朝、岩屋神社を出立した神輿は、市川家で御神体を迎えて、本社へと約4kmの還御の途につく。この還御の儀が“秋葉の練り”として知られている。鼻高、幟、台笠、鉦、太鼓など40数人を1組として、3組の供人がお供をするが、中でも約7mの鳥毛を立てたまま投げ渡す鳥毛投げは圧巻であり、少年の演じる太刀踊りも情趣あふれるものである。道中法泉寺、旧庄屋中越家にも立ち寄りながら、秋葉神社に御神体が奉納される。道化役の油売りが面白さを誘うなど見事な祭りである。

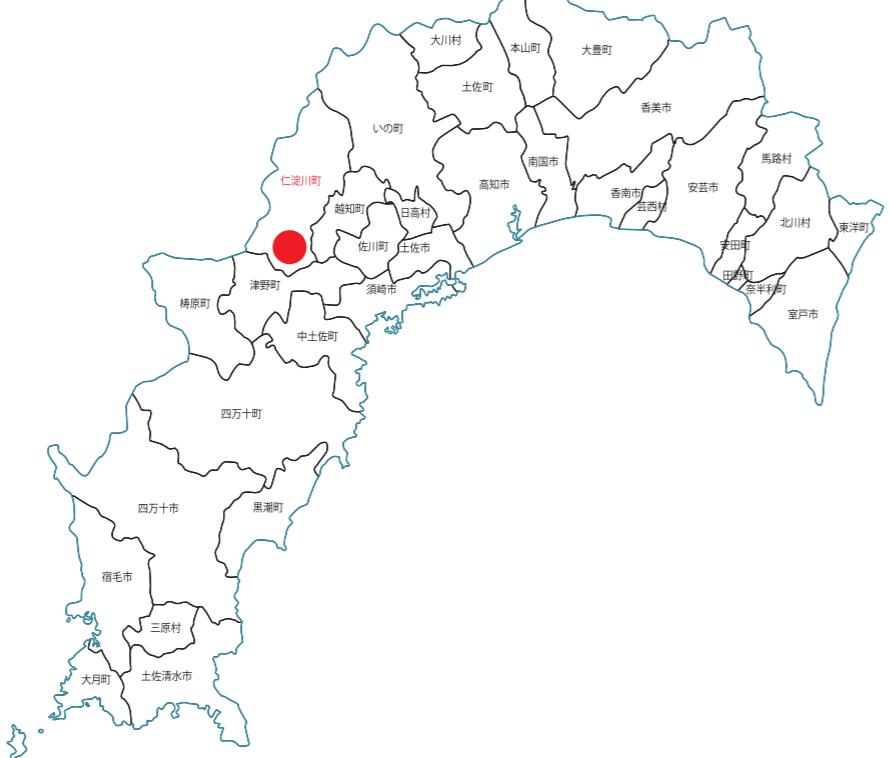


25



# かわ また はな とり おどり 川又花取踊 (県指定 S40.6.18)

11月6日、川又八所神社秋祭りに境内で奉納されるが、過疎のため踊り子の確保ができず、秋祭りでの奉納は近年行われていないものの、踊り子を村内に求めて、村内外の催し物の際などに出演している。陣羽織にたちつけ、襷がけで大太刀は鳥毛の冠り物、小太刀は烏帽子姿である。演目は、五方、切式、抜け太刀、柄付、巻太刀、車、ちがえ、鎌、薙刀、戻し、逆太刀、かたぎ、かたぎとんぼ、引け刀である。五方だけ2人相対して踊るが、その他は円陣になる。歌に入るまでの所作には南無阿弥陀仏を唱える部分があり、花取踊りが念佛踊りの系譜であることを示している。楽器は締太鼓で、演目によって太刀、鎌、薙刀と踊り子の手にするものがかかる。佐川領主家臣恩田武衛八が里人に伝授したという。

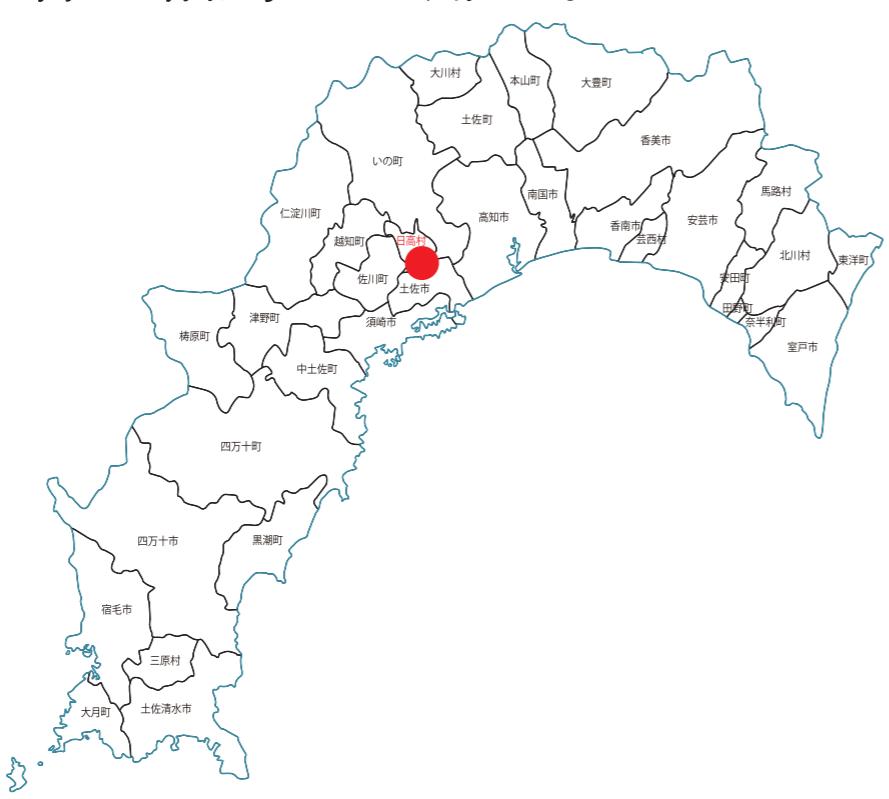


26



# はな とり た ち おどり 花採太刀踊 (県指定 S40.6.18)

10月15日、城八幡宮秋祭りに境内で奉納される。嘉暦3年（1329）、沖名土岐城主別府彦九郎が八幡宮の神前に武運長久を祈願して奉納したことに始まり、その後天文年間（1532～55）に悪病が流行し、村人にもこれを踊らせるようになったとの伝承がある。花採太刀踊の呼称は、盆の芸能花取り踊りが祭礼芸能太刀踊りへと推移過程を示すものとして留意される。入レ葉、シノギ、木下藤吉、マヌキ、五方、近江源氏、車太刀、鎌倉山、クヅシ、忠臣蔵、違太刀、挽葉の12通りの演目があり、名々歌詞が異なる。黒紋付きに縦縞の袴、襷、手甲脚絆に草鞋、白鉢巻姿で2列横隊。このうち鉦、小太鼓各1名がいる。太刀とシデを手にした者が相対して踊る。



27

# 瑞応の盆踊 (県指定 S38.7.5)



8月16日、黒岩地区瑞応の法相宗瑞応寺境内で奉納される。

仁淀川流域の代表的な盆踊りで、この種の踊りは豊年踊りとも称して流域町村に見られる。コリヤセ、千本、絵島、万才、サリトテの5通りの演目がある。各演目の曲調も、身振りも異なるが、コリヤセ、万才、サリトテの歌詞は七七七五調であればどんなものでもよく、即興的に歌いこまれることもあるが、これは囃子詞からの名称である。千本と絵島は口説き節で、古来からの歌詞があり、1節を歌うともう1人の音頭が次の1節を歌い、2人が交互に歌っていく。千本には南無阿弥陀仏の転訛した囃子が挿入される。踊り場中央には、花台と称する櫓を据え、老若男女の踊り子が浴衣姿で踊る。

瑞応寺は、理春尼が夫片岡茂光と兄長宗我部国親を弔うために建立されたものである。



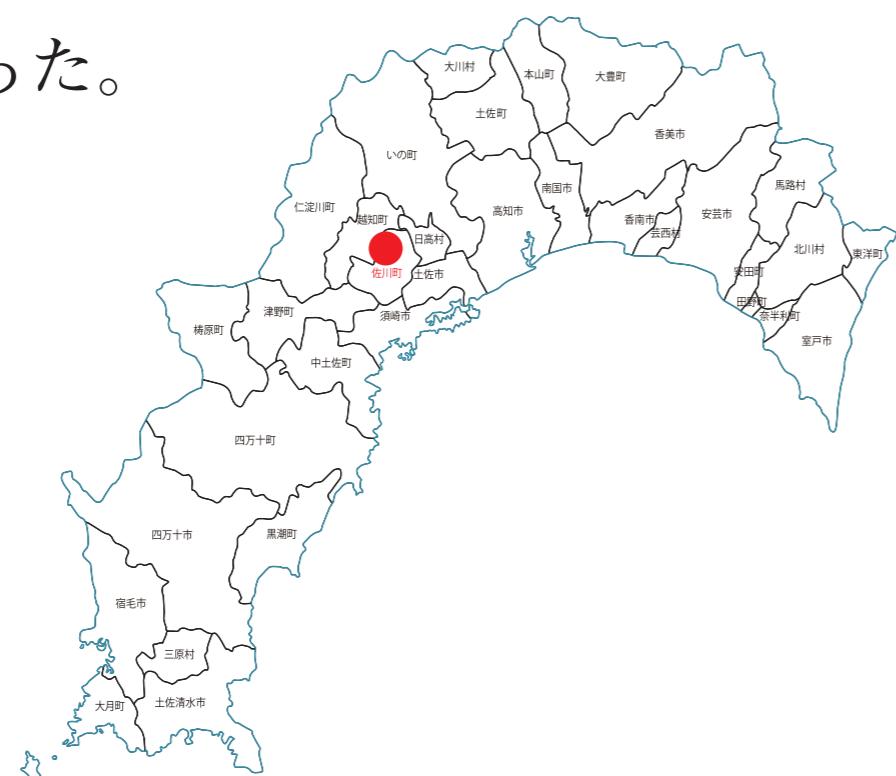
28

# 佐川町太刀踊 (県指定 S40.6.18)



11月3日、黒岩地区四ツ白仁井田神社秋祭りに境内で奉納される。

始の儀、近江源氏、間抜き、忠臣蔵、鎌倉、引や、木下藤吉郎、車太刀、入れ刃、五方、くづしの11通りの演目がある。黒の袴姿に白襷を長く背に垂らし、白鉢巻に手甲をつけ、2列相対して踊るが、鉦と太鼓とは先頭にあって相対する。音頭は列外に位置する。1列は太刀、1列は竹の両端に紙飾りをしたシデ棒を手にして踊る。服装、歌詞とも仁淀川流域沿いの太刀踊りと類似している。明治40年までは、黒岩村流し踊りと称していたが、明治40年東宮殿下御覧の折、谷干城が武士踊りと称するがよからうとのことで改称。昭和40年県指定されるに及んで佐川町太刀踊と呼称するようになった。

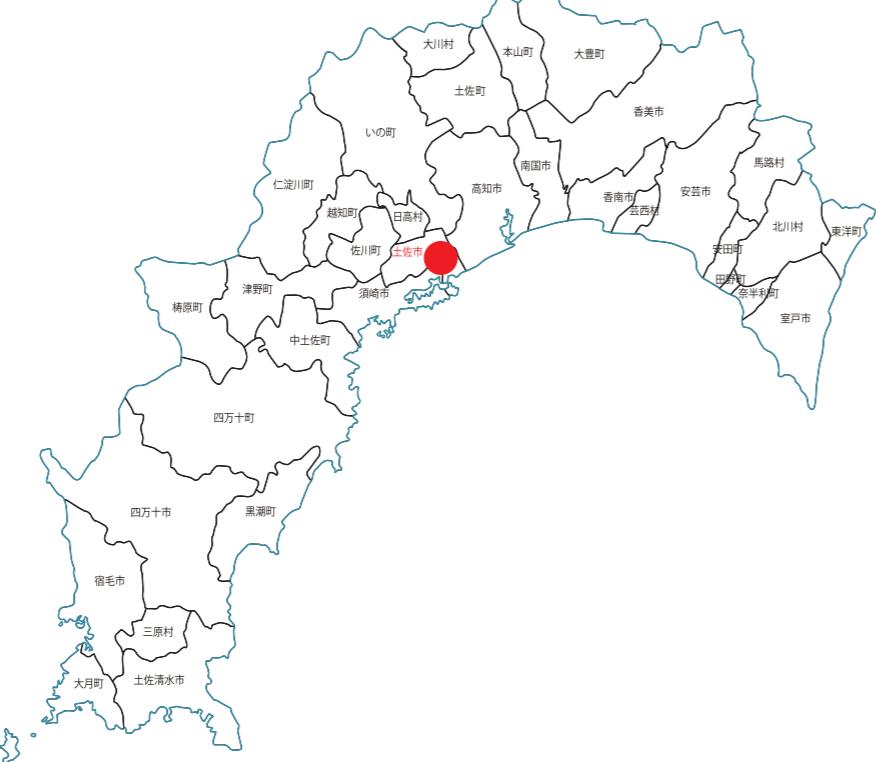


29



# 蓮池太刀踊 (県指定 S40.6.18)

10月31日、西宮八幡宮秋祭りで奉納される。かつては宵宮にも奉納されていたが、現在は祭日のみ。社殿での祭典執行と並行して境内で演じる。神幸では、天狗面に続いて踊り子たちは列をなして、旅所の注連縄を切る。旅所からもどって再度踊るが、ここでは演目のすべては演じない。服装は、全員縦縞の袴、白上衣、白鉢巻、黒足袋、草鞋で2人相対しての横列。えなぎなた、ごほう、くずし、車太刀、忠臣蔵、違え太刀、まぬき、しのぎ、源氏平家、清盛、引きおどりの11通りの演目があり、太刀のほかザイ棒を手に踊る演目もある。踊り子のなかに鉦1名、締太鼓1名がおり、これが楽器であり、音頭は例外にあって歌うが、歌詞は各演目ごとに異なる。



30



# 市野々の神踊り (県指定 H21.3.17)

旧暦9月15日市野々天満宮の秋祭りで奉納される（最近は直近の日曜日）戦国時代末期より伝承されてきた郷土芸能。胸に締太鼓をつけた子供（小中学生）4人を中心にして約15名の大人が大きな扇を持って円状に囲み、歌に合わせて鉦、太鼓、扇が一つになって踊る。子供は伝承の化粧をして衣裳をまとい、大人は白の半着に袴、襷がけである。その昔戦に疲れた武士が刀を扇に代えて戦に苦しんでいる庶民と一体となって踊りを生み出したと言い伝えられている。今は人々の無病息災、五穀豊穣を祈願して踊る。演目は、いれは、ねぎ、さくら、鎌倉、お寺、屋島、なにわ、具足、月待ち、くるま、やはた、玉ぐさ、恋、牛若、恵美須、花、西縣、引恋の18通りある。大きな扇は毎年新しく作る。

